



複眼思考のすすめ

犬 石 嘉 雄*

従来日本人は歴史的地理的風土の影響で“善玉か悪玉か”というように物事を潔癖に割り切りたがる単眼思考の傾向があり、“黒白テレビ”とも言われる。複雑な歴史的地理的風土で生きてきたヨーロッパや中国の人の複眼的思考と少し異なるようである。筆者は英国の電気学会関係者にかかわりあいを持っているが、ここ10年間位で彼らの日本認識は大変化をしている。10数年前、ウェールズの田舎町の英国人教授宅で夕食後 BBC の日本特集を見ていると、日本の工業躍進紹介で始まった番組が終りに近づくにつれ批判的になり、狭い国土で高い金を払って流行のゴルフに熱中している云々の後、この国は昔は中国から文明を輸入し、近年では欧米から文明を輸入模倣しそれを応用して大量生産工業製品を輸出したが、何も新しいものを創造しなかったと結んで知人を慌てさせた。今春、中国の西安市に行ったとき、遣唐使が2,000人にもものぼった事実を知り BBC 特派員の観方にも真理があると感じた。さて、3年前英国の電気学会から“日本の工業教育”についての講演を依頼された。おそらく英国工業の不振に比べ日本工業躍進の原動力が教育にあると考えたためであろう。開口一番日本の工業教育が欧米に比して決して優れているとは思わないが、戦後の企業労使貧困脱出の努力と戦前からの社会特質が躍進の原因であると述べ、にわか勉強の日本対西欧企業の対比を行った。(i)終身雇用対企業間移動、(ii)均質社会対非均質社会、(iii)企業内労組対産業別職能別労組、(iv)高品質労働対低品質労働、(v)官僚指導・経営者の長期計画対短期計画、(vi)激烈な国内競争対穏やかな国内競争、(vii)民需中心対軍需優勢などで前者は日本、後者が英国(欧

米)である。一言でいえば前者は集団的(collective)体質、後者は個別的(individual)体質、あるいは前者は農耕文化型、後者は狩猟文化的ともいえる。日本の企業はこれまで米国という第1走者に続く第2走者で、主として米国で研究された成果を工業化し大量生産するには技術革新に対する柔軟性に富み品質管理面でも秀れた前者の特性が幸いしたが、今後第1走者としては独創性の点で優れた英国などの個別的体質の長所をうまく取り入れる必要があると結んだ。最近欧米留学した若い技術者、研究者の中には個別型の独創性に対する過大評価から日本従来の集団型特性を“悪”と決めつける傾向があるがイソップ物語の鳥と狐の物語のように日本の特性の完全喪失を喜ぶのは欧米企業であろう。現に米国でも日本の“超 LSI”に対抗するため企業が危機感をもって政府プロジェクトの下で結集しつつある。逆に高年令層を中心に日本的な集団的企業体質こそ世界に誇るものであるという信念があるが第1走者になりつつある環境変化の認識不足と個人としての人間の幸福に対する誤解があり、文化摩擦の火種になりかねない。要は企業、教育、文化のすべての面で複眼思想を持って一見相反する2つの型の長所を取り入れ欠点を取り去って柔軟に環境変化に対応して行くことが日本の繁栄を維持するために不可欠である。たとえば教育面でも従来のような画一的路線のほかにちょうどスポーツ選手を養成するのと同じように世界の知能文化オリンピックや独創技術の担い手を養成する多様性を持った複線型教育路線の確立が真剣に検討されるべき時期に差ししかかっている。それも国家民族の観点からだけではなく個人の幸福や能力開花という複眼的思想を取り入れないと、いつの間にか集団主義が全体主義に変わって世界の孤児になるだけであろう。

*犬石嘉雄 (Yoshio INUISHI), 近畿大学, 理工学部, 電気工学科, 教授, 大阪大学名誉教授, 工学博士